

スピノザの哲学とその問題点

二 宮 源 兵

一、序 説

スピノザ (Baruck de Spinoza, 1632-1677) は、歐洲に自由思想を誘発した啓蒙期の先驅者の一人として、オランダに生れた天才的哲学者である。「彼は、英國に於ける經驗論の大成者であるロッキ (John Locke, 1632-1704) と、偶然にも同年の出生である。スピノザの稱えた汎神論は、英國に於けるロッキの經驗論、ヒューム (David Hume, 1711-76) の実証論的、懷疑論的哲学、フランスに於て、理性の自由を主張し乍ら自然宗教を稱えたヴォルテール (F. M. A. Voltaire, 1694-1778)、同様にフランスに於て、感覺に基いて經驗論を組織したコンディヤック (E. B. de Condillac, 1715-80) と共に、中世紀的眠りから未だ完全に覺めていなかつた歐洲人を啓蒙するのに大きな力となつたところのものである。

スピノザの哲学体系は、「主著『エティカ』(“Ethica”, 倫理^(註一))」に記されているのであるが、その原理が「神即自然」(“Deus sive nature”)であるため、若し「神」を強調すれば、汎神論 (Pantheism) が成立し、「自然」を強調すると、自然論 (Naturasism) 若くは唯物論 (Materialism) が体系付けられる。この点から、スピノザ哲学は、複雑性を帯びて來るのであるが、ここには、彼の主著「エティカ」に基いて、彼の汎神論の大意を述べるのが目的である。この目的を達する爲めに、先ずスピノザの生い立ちと、彼に影響を與えたと思われる諸思想について述べることにする。

二、スピノザの生い立ちと影響

スピノザは、ポルトガルからオランダへ避難したユダヤ人シカエル・スピノザ (Micael Spinoza) の子として、オランダの片田舎で、一六三二年十一月二十四日生れた。彼の名は“Baruck de Spinoza”であるが、彼自身の署名は、種々異り、“Espinosa”, “d' Espinoza”, “Benedictus de Spinoza”, B. Spinoza, “de Spinoza”等の書き方がある。彼の父は、富有な商人であつたが、普通の商人とは異つて、行儀、作法、衣服等について純潔と威儀とを保つよう、彼に厳格な躰けを施した。

スピノザはユダヤ人として、初め「ラビ」(“Rabbi”, ユダヤ教の「教師」)になる目的で、学問を始めたので、当時の他の学者達と比べて、著しくその教養過程を異にしている。彼の初等教育の主課目は、「モーセの五書」(“Pentateuch”)、特にその中の「タムールド」(“Talmud”)、「予言書」(“Prophets”)、「聖書」(“Hagiographa”)、及び「カバラ」(“Kabbala”)であつた。是等の研究は凡てヘブル語でなされたのであつて、スピノザは、十四才の時には、既にヘブル語を習得してゐたと傳えられている。続いてラテン語も習得し、中世紀のスコラ哲学に親しむ事が出来たようである。

スピノザは、「タルムード」の研究によつて、永遠なる神の世界統治、世界全一の神学的理念を得ると共に、天分豊かな思惟力によつて、弁証法的推理の訓練をした。「タルムード」の他の面からは、慎しみある交際、平和の愛好、平靜な自足、感情の抑制、隣人愛、社会正義の尊重等の倫理学的理念を演繹する事が出来た。

スピノザは、「タルムード」及びその他の課目による宗教的訓練と相俟つて、アラビア宗教哲学やユダヤ宗教哲学(註7)を研究することによつて、神の啓示を合理化しようとする思想傾向を有つようになつた。

彼は、又アムステルダム^(註8)の医師に知己を得て交遊し、彼から科学的知識を得、学及び技術の方法、自然法の存在等の思想を修得したと傳えられている。

長ずるに及んで、スピノザは、デカルト哲学に接し、確實自明な一般的眞理から一切の個々の事柄を演繹しようとする理性論の影響を受け、これと「タルムード」に於ける神の統治と世界全一の思想、及びアラビア宗教哲学やユダ

ヤ宗教哲学に於ける啓示と知識の融合問題等を組織統一して汎神論を稱えるようになった。彼の汎神論は、神は自然であり、自然は神であつて、神が自然に浸透していること、即ち、神は万物であり、万物一切が神の姿であるから、神を觀る事は、自然万物を觀る事であり、神と交わる事は自然万物に接する事である事を主張する。このような觀点からは、スピノザの汎神論は、ローマ教会若くは教皇を媒介として神と交わる事を主張するローマ教会の在り方並にその教義を否定する傾向を帯びている爲め、一六五六年、二十四才の若さを以つて、彼はローマ教会から破門され、住み馴れた故郷から追放される悲運に遭い、爾來オランダの各地を流浪し、一六六九年、ハーグに定住し、ここでガラス磨きを業として生計を営み乍ら、冥想と著作に専心した。このような事情のため、汎神論の体系を記した“Ethica”は、既に一六六二年から一六六五年にかけて完成していたのであるが、彼の生前には遂に出版する機会を失つたのである。

一六七七年二月二十一日の日曜日、スピノザは、痲疾の肺患の爲め、ハーグで四十五才の生涯を閉じたのであるが彼がローマ教をすてて汎神論を主張したため、教会始め一般社会から、永きに亘つて無神論者であると理解され、約一世紀の間は、彼と彼の思意は殆ど顧みられなかつた。歐洲大陸に於ける啓蒙期が爛熱するにつれて、徐々に汎神論者としての彼の哲学的地位が確認され、一七七七年二月二十一日には、盛大に百年祭が挙行された。彼は二十才を過ぎる頃から、肺患に侵され、これか痲疾となつて終に四十五才をもつて夭折したのであるが、この病患に罹つた頃から、彼の著作の業も始まり、終生痲疾に悩まされ乍ら、創作を怠らず数多の名著を残した。彼の著書には、次の如きものがある。

Opera Posthuma (遺稿), 1677

De Intellectus Emendatione (知力改良), 1656-1662 .

Ethica ordine Geometrico Demonstrata (幾何学的方法に據る倫理学), 1662-1665 (1677 に出版)
Tractatus Politicus (政治論), 1677

Tractatus brevis de Deo et Homine eiusque Felicitate (神及び人間の幸福に関する論説), 1659-1661
(1850に発見)

Tractatus Theologico-Politicus (神学政治論), 1663-1670

右の中、「Ethica」は、彼が三十才の時起稿し、三年を費して完成したものであるが、既に述べたように、この書は汎神論の体系を記しているため、彼の生前には出版する機会を失い、死後出版されたものである。本書は、今日まで世界に存在する巨多の哲学書の中、特異な書であつて、題名が示しているように、「幾何学的論証」によつて、汎神論の体系を立てたところのものである。即ち、本書は、哲学的、倫理的、及び神学的諸理念に關して、公理、(Axiom)、定義 (Definition)、定理 (Proposition)、系 (Corollary) を立て、之に對して夫れ夫れ証明 (Proof) をなし且つ備考 (Note) を記したものである。本書こそ、スピノザの天才的遺産であつて、哲学界に於て永く記念さるべき不朽の名著である。

(註一)「Ethica」の本題名は、「Ethica ordine Geometrico Demonstrata」

(註二)「Deus sive nature」(「神即自然」)にひつは「Ethica」の第一部の定理十四、定理十四の系一、二、定理十五、定理二十等参照

(註三)「Pentateuch」は、旧約聖書の最初の五書即ち創世紀、出エジプト記、レビ記、民数紀略、申命記を云う。旧約聖書の他の部分をなす予言書及び諸書に對して、「法典」とも云う。

(註四)「Talmud」は、「Pentateuch」の中に含まれている純粹の法典の部分であつて、ユダヤ教の教典である。第五世紀の中葉ヘルサレムでヘブル語で書かれた「ヘルサレム典」(「The Jerusalem」)と、第六世紀の末葉バビロンでアラム語で書かれた「バビロン典」(「The Babylonian」)とがある。

(註五)「Kabbala」は「伝説」の義であつて、第九世紀より第十三世紀頃まで行われたユダヤの神秘哲学である。新プラトン学派の影響を受け、世界は絶対者「エソソフ」(「Esophi」)の必然の流出である事を説く。第九世紀に成つた「ゼジラー」

(「Zezirah」) (創造篇)と、第十三世紀に成つた「ゾーハール」(「Zohar」) (光耀篇)の二書を經典とする。

(註六)アラビア宗教哲学は、アラビア人の間に發達したアリストテレス哲学であつて、知識と啓示を調和しようとする哲学。(註七)ユダヤ宗教哲学は、アラビア宗教哲学に並行して、ユダヤ人の間に起つた哲学で、その内容はアラビア宗教哲学と殆んど同一。

三、スピノザ哲学の起原

スピノザ哲学は、既に述べたように、その思想内容に於ても、理論の構成に於ても、特異な地位を占めていて、極めて多くの学者によつて研究されている。この特異な汎神論的哲学の起原については既に述べたところであるが、その少年時代の感化については種々の説がなされている。これらの諸説に瞥見を與える事は、スピノザ哲学を理解する上に大きな助けとなるから、その大要を述べる事にする。

哲学史上、スピノザ哲学の起原とされているものには、デカルト、マイモニデス、アラビア宗教哲学、ユダヤ宗教哲学、新プラトン哲学、スコラ哲学、ブルノー、タルムード、カバラ等がある。

デカルト (Rene Descartes, 1596-1650) をその起原とする理由は、デカルトが、数学のみを確實自明な学となし哲学の方法も数学的方法によつてのみ妥當な研究の目的を達し得るとなす事、一切の知識は、自明な直覺的眞理を原理として、之より演繹されるものである事を主張する事が、全くスピノザ哲学の方法と一致するからである。“Ethica”は、全くデカルト的思惟の方法によつたものである。

マイモニデス (Maimonides 1135-1204) をその起原とする理由は、マイモニデスは、神学者であり、天文学者であり、即ち、彼は神学者であると同時に自然科学者であつて、一方に於ては、タルムードを研究した神学者としての信仰と、他方に於ては、アラビア宗教哲学によつて培われたアリストテレス哲学の實在との調和を図つている点が、スピノザの「神即自然」の根本原理と一致するからである。

アラビア宗教哲学は、元來マホメット教のコーランを合理化するために用いられたアリストテレス哲学であつて、一切の實在や人間行爲(資料)は、神若くは啓示(形相)に合一する事を目的とすると説く宗教哲学である。この点でアラビア宗教哲学は、スピノザの「神即自然」の思想と一致する。ユダヤ宗教哲学も亦、これと同様に、啓示即ち神が、一切の存在及び人間行爲の統一原理である事を説く哲学であつて、タルムードの雰囲氣で育つたスピノザに取つては、この思想は宿命的であつたと思われる。

新プラトン哲学は、一切の實在は、第一原因(一者)から必然に流出したものであつて、一切の實在は、第一原因者の延長であり影である事を説く点に於て、スピノザ哲学を裏付けるのに役立つ哲学である。

スコラ哲学 (Scholasticism) をその起原とする理由は、スコラ哲学は、信仰と知識との優越論であつて、正統的

スコラ哲学者は、信仰の優越を主張し、信仰が一切の知識の原理になる事を結論して、信仰と知識との統一を図るからである。

ブルノー (Giordano Bruno, 1549-1600) にその起原を求める者の説によると、元來、汎神論即ち神(形相)が万有(資料)の中に充ち満ちてゐる事を主張したのは、ブルノーであつた事、又ブルノーが、汎神論の爲めにローマ教会から破門されて流浪の生活を送り、遂に捕えられて、十字架上に雄々しく殉教した事を想ひ、自分の同じ境遇を顧みて、自らブルノーに心惹かれたであろう事が推察される。

以上のような諸思想体系が、スピノザの天才的思惟力によつて綜合されて、「神即自然」の根本原理が創作されたものと思われる。

(註一)チカルトをスピノザ哲学の起原とする学者は、トレンデレンブルグ [F. A. Trendelenburg, (1802-72) : Historische Beiträge zur Philosophie, 3 Bde, 「哲学の歴史的资料」三卷、1946-67]、クノー・ライスマン (Kuno Fischer, 1824-1907 : Geschichte und neueren Philosophie, 「近世哲学史」、1854-77) である。

(註二)ライモニダスをスピノザ哲学の起原とする学者は、クワン(Victor Cousin, 1792-1867 : Cours de l'histoire de la philosophie moderne, 「近世哲学史」1841) である。

(註三)アラビア宗教哲学、新プラトニ哲学及びマイモニダスをスピノザ哲学の起原とするものに、チ・カール (de Carriell) がある。

(註四)ニダヤ宗教哲学をスピノザ哲学の起原とする者は、ギンスベルグ (Ginsberg) である。

(註五)スコラ哲学をスピノザ哲学の起原とする者でフロイトエンタル (Jacob Freudenthal, 1839-2907 : Spinoza-Studien, 「スピノザ研究」1896-97 : Die Lebens-geschichte Spinozas, 「スピノザ伝」, 1898 ; Spinoza, sein Leben and seine Lehre 「スピノザの生涯と学」, 1804) がある。

四、スピノザ哲学の体系

スピノザ哲学の体系は、概括的に云うと、極めて簡明であつて、世界は、神(形相)と自然(資料)とより成ると云う事である。「神即自然」(“Deus sive nature”)が、スピノザ哲学の原理であり、公式である。この原理を更に

分析的に体系化しようとする、スピノザ哲学は、複雑難解となつて来る。即ち、神は何であるか。神が自然であるならば、超越的の神と現実的自然との統一調和は如何にして可能であるか。是等の問題の解決の爲めに、スピノザ哲学は、三大問題に分れる。

1. 神に関する問題、即ち、汎神論の問題（「エティカ」第一部）
 2. 神の統一に関する問題、即ち、神秘主義の問題（「エティカ」第一部—第五部）。
 3. 人間の問題、即ち、倫理学の問題（「エティカ」第四部—第五部）
- これらの問題を、彼の名著「エティカ」の内容から分析すると、
1. 神の性質の問題、（第一部）
 2. 精神の起原及び性質の問題、（第二部）
 3. 感情の起原及び性質の問題、（第三部）
 4. 人間の制約或は感情の力の問題（第四部）
 5. 悟性の力或は人間の自由の問題、（第五部）
- 更に、是等の諸問題を概括すると、スピノザ哲学は、二大体系に分れる。
1. 神の問題、（第一部）
 2. 人間の問題、（第二部—第五部）

五、神の問題（汎神論）

一、絶対無限な本体としての神

神は、絶対無限な本体である。即ち、神は、一切の比較や対照を絶して、夫れ自体でその本質を表示するもの（絶対者）であり、一切の制約を越えて夫れ自体で存在性を有するもの（無限者）であり、「夫れ自体の中に在り、且つ夫れ自体によつて理解されるもの」^(註1)（本体）である。神及び本体の定義によれば、

「神とは、絶対的に無限な實在即ち永遠無限の本質を表示する無限に多くの屬性よりなる本体である」^(註2)

「本体とは、夫れ自体の中に在り且つ夫れ自体によつて理解されるもの、即ちその概念を形成するために他の概念を要しないものである」^(註3)。

更に、本体としての神を説明するために、本体自体は、他の本体から生ずる事は出来ない事、本体の性質には、「存在」と云う事が含まれている事、本体は必然に無限である事を立証している。

「本体は、他の本体から生ずる事が出来ない」^(註4)。

「本体の性質には、存在が属している」^(註5)。

「各永遠の無限の本質を表示する無限に多くの属性より成る神或は本体は、必然に存在する」^(註6)。

「凡ての本体は、必然に無限である」^(註7)。

二、絶対無限に多くの属性を含む実在としての神

絶対無限な本体としての神は、又絶対無限に多くの属性を含んでいる。これ、神は自然であり、全包括的実在であるからである。神は「種類」に於て無限な属性、即ち無限な種類の属性を含んでいると云つても、未だ不十分である。実に、神は、「絶対無限」に多くの属性を含んでいると表明するより外に表現の方法はない。何故ならば、「絶対無限なものの本質には、本質を表示して否定を含まない凡てのものが属する」^(註8)からである。

三、不可分な本体としての神

絶体的に無限な本体である神は、区分される事は出来ない。何故ならば、若し本体が区分されるとするならば、その区分された部分は、絶対に無限な本体の性質を保有しないからである。そして、その区分された部分が、絶対無限な本体の性質を保有するとするならば、同一の性質を有する多くの本体が存在する事になるが、これは不合理である。又若し、それが絶対無限な本体を保有しないとするとするならば、絶的に無限な本体は存在しないことになるが、これも亦不合理である。故に

「絶体的に無限な本体は、区分されない」^(註9)。

かように、スピノザは、両刀論法 (Dilemma) 的推理をもつて論証している。

四、必然的実在としての神

如何なるものに就ても、それが存在すること、若くは存在しない事に就ては、何故にそれが存在するか、或は何故にそれが存在しないかの理由を明らかにする必要がある。例えば、若し三角形が存在するならば、何故にそれが存在するか、或は何故にそれが存在しないならば、それが存在しない理由がある筈である。然るに、かような存在若くは非存在の理由は、そのものの性質の中に必然的に含まれているところのものである。例えば、三角形が存在する事は、その三角形の中に、「三角形」と云う普通の形体が含まれているから、その三角形は三角形の形体として必然的に存在するのである。又、三角形の円が存在しないと云う理由は、三角形の性質から必然的に否定されるのである。かように、絶対無限な神は、その絶対性及び無限性と云う屬性を有する形相として、自然を資料とする実在として、神そのものの中に必然的な存在性を有するのである。これ

「本体の性質には存在が属する」からである。

神が必然的本体であると云う意味に於て、資料としての神、即ち自然若くは「所産的自然」(“natura naturata”の中)には、「何一つとして偶然なものはなく、凡てのものが神的性質の必然に由つて、或る仕方に於て存在し、且つ活動するように決定されている」のである。ここに、汎神論の一面を表わす決定論(Determinism)即ち万物が神の性質の必然性によつて決定されていると云う決定論が表われている。

「所産的自然」(“natura naturata”)と云う概念は、万有の必然的原因である神自体の本質を「能産的自然」(“natura naturans”)と呼ぶ概念に対して用いられているのである。

五、全包括的実在としての神

既に、第一部定理十四で明らかであるように、神の外には、如何なる本体もなく、又如何なる本体も考えられなく。従つて、次の立言が定理として必然に與えられる。

「有るものは凡て神の内にある。且つ、如何なるものも神がなければあり得ず、又考える事が出来なく」。

ここに、スピノザの汎神論、即ち、「神即自然」(“Deo sive nature”)、[自然即神] (“Nature sive deo”)であると云う理論が存在している。

六、万有の原因者としての神

神は、万有の全包括的實在であるが、神は万有を自己の中に包括して、靜止を続けている實在ではない。神は、自己の必然的性質によつて、万有の存在を可能ならしめる實在である、即ち、神は、万有一切の原因者である。スピノザは、この事を次のように表明している。

「神的性質の必然から、無限に多くのものが、無限に多くの仕方にて、（即ち、悟性の対象であるべき無限に多くのものが）生じなければならぬ」。

この定理から、必然に次の三つの系が成立する。

「これから第一に、神は、悟性の対象であるべき無限に多くのものの能動的原因である事が起る」。

「第二に、神は、偶然によつての原因ではなくて、それ自体によつての原因である事が起る」。

「第三に、神は、絶体に第一の原因である事が起る」。

そして、神は、自己原因であると同時に、万有の能動的原因であり、第一原因である理由は、神は、絶対無限な實在であるから、何によつても支えられず、又強制されることのない存在であつて、只自己の必然的法則によつて働く實在であるからである。

「神は、何ものによつても強制されずして、只その性質的法則に従つて働く」。

かように、神は、自己に内在する性質の必然的法則に従つて働き、これによつて万有の存在が可能になるのであるから、神は、万有の内在的原因であつて、超越的原因ではない。

「神は、凡てのものの内在的原因であつて、超越的原因ではない」。

ここにも亦、スピノザの汎神論の一面が表われているのであつて、スピノザの神は、万有の内在的原因であつて、有神論者の神のように、超越的原因ではない。有神論者は、万有は超越的實在である神によつて創造され且つ支配されていると説くのであるが、スピノザは、万有は神自体の内在的必然性によつて、必然に生じたものであると説くのである。これ、スピノザの神は万有（自然）であり、万有（自然）は神であるからである。

七、永遠な實在としての神

既に述べた定理十二に依れば、神は、必然に存在する實在である。即ち、神は、存在そのものが起るところの本体

である。存在そのものが起る本体とは、如何なる制約も、如何なる原因も存しない本体を意味し、従つて、始めもなく、終りもなく、常に存在する実在を意味している。即ち、

「神は、絶対に無限な実在、即ち、^(註21)各々が永遠無限の本質を表示する無限に多くの屬性より成る本体である。」又、「神或は神の凡ての屬性は、永遠である。」

これらの定理から、又次の眞理が演繹される。

「神の存在は、その本質の如く、永遠の眞理である」^(註22)。

以上は、「エティカ」第一部「神」に関する理論、即ち汎神論の概要である。この汎神論の特徴は、先ず有神論即ち唯一、絶対、永遠な神が世界を創造し支配していると云う超越的神観に対して、神と世界との一体を説く内在的自因的神観と世界観を説くところにある。更に、汎神論は、万有一切が神であり、神が一切である事を主張するから、有限相対な現実界は、無限絶対な神の中に還没する事になり、この点では、汎神論は無宇宙論 (Acosmism) となる。万有一切が神である事を説くところから、汎神論は万有神論若くは万有神教とも呼ばれる。

万有一切は、神即ち実体の必然的法則によつて生ずる様態 (Mode) として必然的に存在するのであるが、この点に於ては、スピノザの世界観は機械論 (Mechanism) になる。又、万有一切の存在と活動とは、神の必然的法則に従つて可能となるのであるから、万有は、それ自体の存在と活動との原因を、それ自体の中に有していない。この意味に於ては、万有は、自由を有せず、神の必然的法則によつて、その存在と活動とが決定されると云う点に於ては、決定論 (Determinism) になる。又、汎神論は、既成教会を否定する結果となり、スピノザが破門される原因になつた事は、前述した通りである。

(註1) 第一部 定義三。

(註2) 同 定義六。

(註3) 同 定義三。

(註4) 同 定理六。

(註5) 同 定理六の証明。

(註6) 同 定理十一の証明のノート

(註7) 同	定理八の証明のノート一、二
(註8) 同	定義六の証明
(註9) 同	定理十三の証明及び系
(註10) 同	定理七
(註11) 同	定理二十九
(註12) 同	定理二十九のノート
(註13) 同	定理十五
(註14) 同	定理十六
(註15) 同	定理十六の系一
(註16) 同	定理十六の系二
(註17) 同	定理十六の系三
(註18) 同	定理十七
(註19) 同	定理十八
(註20) 同	定義六
(註21) 同	定理十九
(註22) 同	定理二十の系一

六、人間の性質の問題（倫理学）

一、決定論 (Determinism)

スピノザの人間論若くは倫理学説は、既に述べた決定論的世界観に基礎を置いている。スピノザの世界観は、絶対的必至論 (Absolute Necessitarianism) とも呼ぶべき決定論である。前述したように、万有は、神の中に在る。万有は、神の必然的法則に従つて、神の中に存在し又活動するように決定されている。この事を、スピノザは次のように云つてゐる。

「存在する凡てのものは、神の中にある。且つ如何なるものも神なくば存在し得ず、又思惟し得ない」。

「自然の中には、一つとして偶然なものはなく、凡てのものが神的性質の必然に由つて、或る仕方に於て存在し且つ作用するよう決定されている」。

スピノザは、全体としての自然が、神の永遠必然な性質によつて決定付けられている事を主張するのであるが、彼は、更に進んで自然界に於ける個物も亦必然的法則によつて決定されている事を主張するのであるが、彼

「有るものは、凡て夫れ自体の中に在るか、或は他のものの中にある」。

「與えられた一定の原因から、必然に或る結果が起る。反対に一定の原因が與えられない場合に、結果の起る事は不可能である」。

この決定論の原理は、人間精神にも適用出来るのであつて、一切の精神現象は、必然的法則によつて決定されている。

「精神の中には、絶対な或は自由な意志は存しない。精神は、或る原因に由つて、これ或はそれを欲求するよう決定され、その原因も亦他の原因によつて決定され、この後者も亦更に他の原因によつて決定され、かくして無限に進む」。

このスピノザの決定論は、十九世紀に於て、歐洲の思想界の一大傾向として存在していた世界観を反影するところのものである。十九世紀の歐洲に於ける決定論の主なるものは、シモーペンハウエル (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) の「万有は、『盲目的生存意志』(“Blinder Wille zum Leben”)によつて決定されている世界観、ホルトマン (Carl R. F. von Hartmann, 1842-1906) の「万有は、『無意識者』(“Das Unbewusste”)によつて決定された世界観、フヒヒネル (Gustav T. Fechner, 1801-87) の「万有は同じ本質を有し、同一の法則に依つて支配されていると云う世界観、ロツヒエ (Hermann Lotze, 1817-81) の「万有は皆心を有し、互に關係的に存在すると云う世界観の如きである。

万有、精神も亦、必然的法則によつて決定され、宿命付けられているとするならば、人間生活には自由も希望もないのであろうか。これがスピノザの第二の問題である。

二、自由の問題

スピノザの人間論即ち倫理学は、心理学的性質を帯びているので、自由の問題も亦心理学的に理解される。先ず、人間精神は、次のような觀念の集合体である。

精神 (因果關係を有する諸觀念の集合)

認識過程

- | | | | | | | |
|---------|---|----|---|-------|---|--------------|
| 1. 第一認識 | = | 感覺 | → | 之の随伴物 | — | 1. 消極的情操 |
| 2. 第二認識 | = | 推理 | → | 〃 | — | 2. 意志及び積極的情操 |
| 3. 第三認識 | = | 直覺 | → | 〃 | — | 3. 〃 |

非認識過程

人は、元來是等の明瞭な獨立した實在性を有する諸觀念を有しているのであるが、大部分の人は、第二認識（推理）及び第三認識（直覺）の高い認識に達し得ず、却つて外的事物に拠依して消極的情操を随伴する第一認識即ち感覺の世界と、僅かの第二認識即ち僅かの推理の世界に留つてゐる。人がかような下位の世界に留つてゐる間は、人は自由はない。これ、

「第一の認識は、誤謬の唯一の原因である」^(註1)からである。人は、高位の理性及び直覺の對象の世界、即ち、意志及び積極的情操を随伴する第二及び第三の認識に達する時に、始めて自由を得る。これ、

「第二及び第三の認識は、必然に眞である」^(註2)、からである。而も、推理及び直覺は、万有の根源であり且つ自由の本体である神を知る認識能力であるからである。即ち、理性及び直覺に由つて、人の精神は、神の永遠絶對な本体に關する妥當な認識を得るのである。かくして、神に關する妥當な認識を得る時に、人は眞の自由を得るのである。

推理（理性）は、眞の認識能力、人間行爲を指導する能力、人間に自由を與える能力、最高なものを指向する能力であるが、スピノザは、この理性能力即ち推理を、次のように種々に表現してゐる。

「理性の中には、ものを偶然としてではなく、必然として觀察する性質がある」^(註3)。

「理性の中には、ものを「永遠の相の下に」(“Sub quodam aeternitatis specie”) で認識する性質がある」(註5)。
これらの定理は、理性の理論的能力に就て述べたものである。特に、「ものを永遠の相の下」で認識すると云う言葉は、世界の哲学者が好んで引照するところのものであつて、凡てのもの、凡ての判断は、常に「永遠の相」即ち永遠なる神の姿、神の意志に対照させて思惟し且つ結論を得よと云う事を意味している。理性には、実にかかる深く広い認識能力が含まれているのである。

理性の道徳的認識能力について、スピノザは次のように述べている。

「絶対に徳に由つて働くとは…、理性の指導に従つて行爲し、生活し、吾々の生存を維持することに外ならない」。
「理性の指導に従つて生活する人間程有用な如何なる個物も、自然の中には存在しない」。(註12)。

「徳に由つて働くとは、理性の指導に従つて働く事である」。

かように徳と理性との一致を説く点に於ては、スピノザの徳論は、「徳は知識」(“Virtue is knowledge”)、
「知識は徳」(“Knowledge is virtue”) であると云うソクラテスを始めギリシヤ哲学者の思想を表明してゐる。

更に、理性は、実践道徳の原理でもある。

「理性の指導に従つて生活する人は、能う限り、自己に對する他人の憎、怒、輕蔑等を愛又は正義に由つて報ゆる事に努める」。(註11)。

「理性の指導に従つて生活する人は、自己の爲めに欲求する善を他人にも意欲する」。(註15)。

このスピノザの思想の中に、愛敵及び隣人愛を主張するイエスの人道主義がよく表明されている。

理性は、更に善意、満足、名譽、節制等の原理である事を次の如く述べている。

「善意は、理性に反對せずして、それと一致し、且つそれから生ずる」。(註16)。

「満足は、理性から生ずる事が出来る。又理性から生ずるこの満足のみが、存在し得る最高のものである」。(註17)。

「名譽は理性に反對せずして、それから生ずる事が出来る」。(註18)。

「理性から生ずる慾望は、過度になる事がなく」。(註19)。

理性は又、道徳的判断の原理である。即ち、

「理性の指導によつて、吾々は二つの善の中より大なるものに、又二つの悪の中より小なるものにつく事が出来る」。

スピノザは更に進んで、第三の認識即ち直覚が最高の徳、最高の認識即ち神の認識である事を述べている。第三の認識が最高の徳、最高の満足である事について、次の如く述べている。

「精神の最高な努力及び最高な徳は、ものを第三の認識に於て認識する事である」。

「第三の認識から、有る限りの最も高い精神の満足が生ずる」。

第三の認識は、神の認識である事について次の如く表明されている。

「精神の最高な徳は、神を認識する事、或はものを第三の認識に於て認識する事である」。

「吾々は、第三の認識に於て、認識する凡てのものを樂しみ、又実に原因としての神の觀念を伴う」。

「第三の認識から、必然に神に対する知的愛が生ずる」。

「第三の認識から生ずる神に対する知的愛は、永遠である」。

以上に述べたような本質を有する理性と直覚とによつて、絶対永遠な本体であり、自由の本源である神を認識する時に、人は眞に自由である事が出来るのである。そして、かような自由を得た人こそ、眞に救を得た人である。この点に就て、スピノザは次の如く述べている。

「自由の人は、全く死について考える事なく、又彼の智慧は、死についてではなく、生についての省察である」。

自由の性質に関しては、次のように述べている。

「若し、人間が自由のものとして生れたならば、彼等は自由に留る間は、善悪の觀念を形成しなかつたであらう」。

何故ならば、「自由に生れ、且つ自由に留る人は、妥当な概念のみを有する。又それ故に、彼は悪の觀念を有しな

この意味に於て、眞の自由人は、眞の道徳者であつて、善の形成者である。自由人は、善の形成者であるから、従つて、道徳の実践に於ても偉大さを示す。この意味をスピノザは、次の如く述べている。

「自由な人の徳は、危難を克服する場合と同様に、それを遠ざける事に於ても、その偉大さを示すものである」。

「自由の人に於ては、正当な場合の退避は、鬭争と同様に大なる勇氣の証明である。換言すれば、自由の人は、同じ勇氣或は沈毅をもつて、鬭争と同様に退避を選ばであらう」^(註32)。

「無知の人々の間に生活する自由の人は、能う限り、彼等の親切を遠ざける事に努める」^(註33)。

「自由の人のみ互に完全に感謝する」^(註34)。

「自由の人は、決して虚偽の行爲を爲さずして常に正直である」^(註35)。

自由人は社会の有用な存在であり、互に友情に依つて團結し、他人の利益を図り、國家の共通的法律を守る事が出来る。

「自由の人のみ互に完全に有用であり、且つ友情の最も堅い結束に由つて互に結合し、又彼等のみ等しい熱愛を以つて互に親切を爲す事に努める。それ故に、彼等のみ互に完全に感謝する」^(註36)。

「理性に指導される人は……、彼が自由に生活しようと努める限り、共同の生活及び一般の利益を慮り、又従つて、國家の共同的決定によつて生活する事を努める。それ故に、理性に指導される人は、一層自由に生活するため、國家の共通的法律を守る事に努める」^(註37)。

自由人は、「社会の有用な存在であり、互に友情に依つて團結し、他人の利益を図る」存在であると云う意味に於て、この倫理學説は、利他主義(Altruism)を表明し、「彼が自由に生活しようと努める限り、共同の生活及び一般の利益を慮る」と云う意味に於ては、功利主義(Utilitarianism)の傾向を表わしてゐる。

かくして眞の自由若くは救済の原理は、理性と直覚とであるが、この理性と直覚とは、その機能に於ては、理性が下位にあり、直覚が上位にある。何故ならば、理性は、人が眞の自由(救済)を得るために、合理的方法を興え、直覚はこれが爲めに、最高の叡智即ち最高の認識を興えるからである。ここにスピノザの思想に於て、理性の機能を組織すると実践的倫理が生じ、直覚の機能を組織すると神秘的倫理が生ずる。前者の立場は、主知論(Intellectualism)若くは理性論(Rationalism)であり、後者の立場は、禁慾論(Asceticism)若くは神秘論(Mysticism)である。

3. 実践倫理(徳論)

(1) 善悪の觀念

有限な世界に於ては、夫れ自体に於て善なるものはない。善と悪とは、人がその性質に適合するものを選び取る（快）か、之を避ける（悪）かによつて生ずる。スピノザは、之を次のように表明している。

「吾々は、自分の生存の維持に有用、或は有害なもの、即ち吾々の活動力を増加し又は減少し、促進し又は妨害するものを善或は悪と呼ぶ。それ故に、或るものが吾々を快或は不快に移す事を知覚する限り、吾々はそれを善或は悪と呼ぶ。それ故に、善及び悪の認識は、快或は不快の感情自身から必然に起るところの快或は不快の觀念に外ならない」。

「吾々は、不快の原因たるもの、即ち、吾々の活動力を減少し或は妨害するものを悪と呼ぶ」。

かような意味に於て、スピノザの善悪論は、快樂主義（Eudaemonism）の傾向を帯びている。そして快及び不快の認識は、眞の認識及び偽の認識と一致し、それは又従つて、人に有用である事及び有用でない事と一致する。

「眞の認識に導き、或は吾々の認識を妨害し得るものに於てのみ、吾々はその善か或は悪かを確認する」。これ、「精神は理性に従つて思惟する限り、認識以外のものを欲求せず、又認識に導くもののみを彼に有用であると判断する」からである。

眞の認識であり、人に有用であるところのものは、従つて又、人の性質と一致するところのものであり、かくの如きものこそ善であり、然らざるものが悪である。即ち、

「如何なるものも、吾々の性質と一致すれば夫れは悪であり得ない。夫れが吾々の性質に反対する限り、夫れは悪である」。

「ものは、吾々の性質と一致する限りに於ては必然に善である」。

かように、善とは、人の本然の姿、即ち、人が本然の活動を営み、その活動力を増し、營養力を増進する状態、謂わば自然の状態に帰る事である。この意味に於て、スピノザの倫理學説は、自然主義的傾向を帯びている。

(2) 徳論及び最高善論

徳は人の自己保存の欲求に基礎を有している。徳は、人間の本質によつてのみ説明されるのであつて、人がその生存を維持しようとする精神の力を意味している。即ち、

人は、己が生存の維持を努むれば努むる程有徳になり、反対に、己が生存の維持を図らない限り、無能であり非徳である。スピノザは、次の如く述べている。

「人が自己に有用なものを求めること、即ち、自己の生存を維持する事を一層多く努め、且つ一層多く爲し得るに従つて、益々人は有徳である。又反対に、人が自己に有用なものを求めること、即ち、自己の生存を維持する事を止める限りに於て、人は無能である」。

「同時に、生存し、行爲し、且つ生活すること、即ち、現実に存在する事を欲しない人は、幸福に生存し、善く行爲し、且つ善く生活する事が出来ない」。

「如何なる徳も、これ（自己保存の努力）より先に考えられることは出来なく」。

「自己保存の努力は、徳の第一の且つ唯一の基礎である」。

「絶対に徳に由つて働くとは、吾々に於ては、自己に有用なものを求める事に基いて、理性の指導に従つて行爲し、生活し、自己の生存を維持することに外ならない」。

スピノザが、徳を自己保存の欲求であると説く点に於て、彼の倫理学説は、利己主義説若くは自我説 (Egoism) を表明している。スピノザは、これを裏付けるように、次の如く述べている。

「何人も、他のものの爲めに、彼の生存を維持する事に努めはしない」。

この点に於て、スピノザの倫理学説は、共同体としての社会生活を否定するのみならず、先に述べた愛他主義乃至人道主義と矛盾することになる。然し、スピノザ哲学の眞の意味から考えると、この定理は、そのように考えるべきでない。何故ならば、スピノザ哲学に於ては、神は万有であり、万有は神であり、人も亦万有の中に包攝されているのであるから、人が自己生存の維持に努力する事は、全体としての万有即ち神（本質）と一体となる事を欲求し、努力する事を意味しているからである。このことは、次の言葉からも理解される。

「各々のものが、その生存を固執しようとする努力は、そのものの單なる本質自体によつて説明せられる。又他のものの本質からでなくて、そのものの本質が與えられた事のみから必然に、各々の人が自己の生存を維持しようとする事が起る」。

既に述べたように、自己の生存の維持に有用なものを決定するのは、理性である。そして、この理性の認識の最高なもの、神の認識である。故に人の生存を維持する努力、即ち、理性の認識は、神を認識する事に由つて完成する。この神の認識こそ、精神の最高の徳である。

「精神の最高の善は、神の認識である。又精神の最高の徳は、神を認識する事である」。

かような神の認識、即ち、最高の徳の認識は、有限な世界を有限であると認識するところに出発する。何故ならば、有限な世界を有限であると認識することは、眞の認識、即ち、ものの本質の認識、換言すれば、無限なる神自体を認識する事であるからである。

「吾々は、一層多くの個物を認識するに従つて、益々多く神を認識する」。

このスピノザの思想の中に、弁証法的推理、即ち、自己保存を図る努力は、却つて普遍者に帰一する事であり、有限なるものを有限であると認識する事は、却つて無限者を認識する事であり、個々物をよく認識する事は、却つて神を認識する事であると云う矛盾律による推理を見る事が出来る。

又、徳とは、自己保存の欲求、即ち、眞正なるものへの復帰或は本質の認識を意味してゐる点に於て、スピノザの意味する徳は、ギリシヤ思想に於ける“Virtus”若くは“Excellence”即ち「アンテ」(Arete)「道德的優秀性」、即ち、自己保存及び自己發展の能力及び知識を意味してゐる。

更に、この徳論は、自己保存の本能を道德的行爲の出発点とするホブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) の倫理學説と一致し、神の認識が最高善であると云う点に於ては、形式的には、中世紀の教会倫理思想と一致してゐる。

4. 神秘主義的倫理

(1) 最高の自由

最高の自由若くは最高の解放即ち救済は、人間的鬭争、即ち、形相と実相、感覺と理性との反を克服する事である。この事は、神を直覚する事によつてのみ可能である。何故ならば、直覚は、最高の認識形式であり、その唯一の対象は、神と神の永遠の必然性であるからである。

「精神の最高の善は、神の認識である。又精神の最高の徳は、神を認識する事である」。

「精神の最高な努力及び最高な徳は、ものを第三種の認識に於て認識する事である」。

「この第三種の認識から、有る限り最も高い精神の満足が生ずる」。

第三種の認識、即ち、神の直覚は、人を感覺や感情から解放し、眞の自由たらしめるのである。この意味に於て、スピノザの倫理学説は、神秘的禁慾主義の傾向を表わしている。

(2) 神と人との合一

最高の自由若くは救済は、人が神の直覚即ち第三種の認識を得る事、即ち、ものの本質である神と合一することである。スピノザは、これを次の如く説明している。

「吾々の精神は、自己及び身体を永遠の相の下で思惟する限りに於て、必然に神の認識を有し、又自己が神の中にあり、且つ神によつて考えられる事を知る」。

「吾々は、第三種の認識に於て、認識する凡てのものを樂み、又実に原因として神の觀念を伴う」。

「第三種の認識から、必然に「神に対する知的愛」(“amor Dei intellectualis”)が生ずる」。

「第三の認識から生ずる神に対する知的愛は永遠である」。

「神は無限の知的愛を以つて、自己を愛することに基づいて置いている。何故ならば、

「神に対する精神の知的愛は……、神が自己を愛する所の彼の愛自体である。即ち、神に対する精神の知的愛は、神が自己を愛する所の無限な愛の一部分である」。

神の永遠の自己愛は、人間精神の神への知的愛と一致すると云う思想から、人間に対する神の愛が演繹される。何故ならば、神は自然及び人間を包括している実在であるから、神が自己を愛する事は、自己の一部分である人間をも愛する事になるからである。この事を、スピノザは、次のように述べている。

「これから、神は、彼が自己を愛する限り、人間を愛し、又従つて、人間に対する神の愛と、神に対する精神の知的愛とは、同一であることが起る」。

「これによつて、吾々は自己の幸福、或は福祉又は自由の何たるかを明白に認識する。即ち、それは、神に対する

恒常永遠の愛、又は人に對する神の愛である」^(註55)。

かように、神への知的愛を認識し經驗する事が、人間存在の最高形式である。神への知的愛は、絶對的に公平な純粹感情であるべきである。夫れは、常に變移増減する人間愛の如きものではない。神への知的愛は、神と合一するこゝとであるから、平和であり、平靜な服従であり、最高の満足である。

「神に對する愛は、憎惡に變ずる事が出来な」^(註56)。

「神に對するこの愛は、嫉妬又は猜忌の感情に由つて悩まされることなく、吾々が同じ愛の結果によつて、一層多くの人が神と結合する事を表象する事に従つて、その愛は益々涵養される」^(註56)。

「神に對するこの愛は、吾々が理性の命令に従つて欲求し得る最高の善である」^(註66)。

かくの如く、人は、知的に神を認識し、愛し、合一することによつて、最高の善と満足とを得る存在である。人間の眞の幸福は、實に「神に對する知的愛」を得ることである。このような点に於て、ノーヴァリスが云つたように、スピノザは、「神に醉える人」であつたのである。

(3) 靈魂の不滅

眞の幸福をもたらす神との合一の思想は、靈魂の不滅の思想に導かれる。靈魂の不滅は、永遠にして必然な実体即ち神に遺没する事を意味する。靈魂の不滅は、單に死後の時間的乃至形相的存在を意味しない。夫れは、ものを「永遠の相の下に」思惟する状態そのものに存している。有限な人は、死滅する。然し、神の一部である人間の眞我は、永遠に存在する。

「神の中には、必然にこの及びあの人間の身体の本質を永遠の相の下で表示する觀念が存在する」^(註67)。

「人の精神は、身体と共に絶對的に破壊されずして、その中の永遠なるものが存在する」^(註68)。

スピノザの倫理學說の特徴は、徳を自己保存の本能より説明し、徳に客觀的實在性を與えない点に於ては、ギリシヤ時代及び中世紀の倫理學說から離脱している。他方、彼は、最高善を神の直覺若くは神への帰一に求める点に於ては、プラトンの思想及び中世紀の教会倫理學と同一の傾向を有している。而して、スピノザの最も獨創とするところは、神と自然とを同一視して、「神即自然」に凡ての思惟、行爲、その他凡ての眞理の根底を置くとするところの汎神論乃

至神秘主義を主張する点にある。従つて、彼の思想は、近世初期に於ける啓蒙期乃至科学勃興時代の一異彩であつた。

- (註1) 第一部 定義十五
- (註2) 同 定義二十九
- (註3) 同 公理一
- (註4) 同 公理三
- (註5) 第二部 定理四十八
- (註6) 同 定理四十、四十一、四十二
- (註7) 同 定理四十一
- (註8) 同 定理四十一
- (註9) 同 定理四十四
- (註10) 同 定理四十四の系二、第五部定理二十二、二十九、三十、三十六
- (註11) 第四部 定理二十四
- (註12) 同 定理三十五の系一
- (註13) 同 定理三十六の証明
- (註14) 同 定理四十六
- (註15) 同 定理五十一の証明
- (註16) 同 定理五十一
- (註17) 同 定理五十二
- (註18) 同 定理五十八
- (註19) 同 定理六十一
- (註20) 同 定理六十五
- (註21) 第五部 定理二十五
- (註22) 同 定理二十七

(註23)	同	定理二十七の証明
(註24)	同	定理三十二
(註25)	同	定理三十二の系
(註26)	同	定理三十三
(註27)	第四部	定理六十六の系の備考
(註28)	同	定理六十七
(註29)	同	定理六十八
(註30)	同	定理六十八の証明
(註31)	同	定理六十九
(註32)	同	定理六十九の系
(註33)	同	定理七十
(註34)	同	定理七十一
(註35)	同	定理七十二
(註36)	同	定理七十一の証明
(註37)	同	定理七十三の証明
(註38)	同	定理八の証明
(註39)	同	定理三十の証明
(註40)	同	定理二十七
(註41)	同	定理二十七の証明
(註42)	同	定理三十
(註43)	同	定理三十一
(註44)	同	定理二十
(註45)	同	定理二十一
(註46)	同	定理二十二

(註47)	同	定理二十二の系
(註48)	同	定理二十四
(註49)	同	定理二十五
(註50)	同	定理二十五の証明
(註51)	同	定理二十八
(註52)	同	定理二十四
(註53)	同	定理二十八
(註54)	第五部	定理二十五
(註55)	同	定理二十七
(註56)	同	定理三十
(註57)	同	定理三十二
(註58)	同	定理三十二の系
(註59)	同	定理三十三
(註60)	同	定理三十五
(註61)	同	定理三十六
(註62)	同	定理三十六の系
(註63)	同	定理三十六の系の備考
(註64)	同	定理十八の系
(註65)	同	定理二十
(註66)	同	定理二十の証明
(註67)	同	定理二十二
(註68)	画	定理二十三

七、スピノザ哲学を唯物論的に解釈する問題

スピノザ哲学を唯物論的に解釈する企ては、今世紀に入つて、多くソ聯の学者達によつてなされた。スピノザ哲学の公理が、「神即自然」「自然即神」である限り、かかる企ての可能性は、多分にあるのであるから、スピノザ哲学を理解するに当つて、その唯物論的解釈を一通り弁えておく事は、強ち無駄な事ではない。

ここにはタールハイマーとデボーリンとの共著になる「スピノザと弁証法的唯物論」を取り上げ、その大要を記する事にする。勿論、その原著に当つて論ずる事は、不可能であるので、その日本語訳による事を断つておく。

本書の主張点は、先ずスピノザ哲学の公理「神即自然」「自然即神」の批判から始まる。彼等によると、「神即自然」の表現は、スピノザの眞意ではなくて、「自然即神」がその眞意であつた。スピノザが「神即自然」と表現したのは、ローマ教会の監視を逃れる爲めのカモフラージュに過ぎなかつた。

スピノザは、「神即自然」の思想の反面、「自然即神」の思想を表現しているが、この思想は、客観的世界の存在を認めるところの唯物論的主張である。而も、スピノザは、一切の理念は、この客観的世界即ち自然より必然的に演繹されるものである事を主張する。スピノザが唯物論者である理由は、先ずこの点にある。

スピノザは、更に、唯心論的目的論を拒否し、唯物論的決定論を主張する。即ち、彼は、ものは互に決定し合い、精神も亦ものに制約されている事を主張する。

スピノザは、自由の理念について述べているが、これは、彼が「神学的政治論」(“Theologisch-politische Abhandlung”)の立場から論じたものであつて、自由な科学思想の擁護のために、宗教的迷信に対して反抗を試みたところのものである。本書は、既成宗教の打破について、次の如く述べている。

「スピノザは説明する。宗教は何ら理論的意義を有しない。宗教は常に実践的生活のための意義しか持たなかつた。即ち、権力者によつて人民を拘束するために利用された。迷信は恐怖によつて發生し、存続する。それ故、宗教的偏見は、今日まで存続している奴隸制度の痕跡である」。

スピノザの「神即自然」「自然即神」の思想は、唯物論的に理解すべきであると云うことは、当時の時代思想並に

スピノザを取り囲んでいた社会の情勢から、必然に理解されるのである。多くのスピノザ研究者達が、スピノザ哲学の起原が、タルムード、カッバラ、スコラ哲学、デカルト等にあると主張するのは、スピノザが十七世紀に擡頭した唯物論的思想に浸染していた事を知らない者の説である。十七世紀には、スピノザが育つたオランダに於ては、アンリ・ドゥ・ロアの出現によつて、唯物論が勃興し、他國で発禁になつた唯物論者の著書や非合法的著書が出版された程であつた。スピノザは、かような新興的文化を呼吸した唯物論者であつた。

更に、「神即自然」「自然即神」の思想は、精神と物質との同質化若くは物質を靈化する思想傾向を表わしている。物質を靈化しようとする思想傾向は、ルネッサンスの一特徴であつた。即ち、資料(ヒュレ)は、それ自体、生命(ピオス)を持つている。それには、運動、欲求、表象が必然に與えられている。これらの性質なくては、一般に実体は思惟されない。かような思惟の傾向がルネッサンスの一つの思想傾向であつて、スピノザは、この傾向に便乗したに過ぎない。

「神即自然」「自然即神」と云う表現に於て、スピノザは、自然を形式的に神と名ずけたに過ぎない。スピノザは、その著「エティカ」に於て、神はその屬性として思惟と延長とを有するものとして、神を物質(自然)と同一視している。

ルクレルク(一二二四)によると、スピノザは「エティカ」の原稿において、「自然」と云う概念のみを用いていたが、後友人の忠告によつて、「神」と云う概念をつけ加えた。この意味から、スピノザの哲学体系に於ける神は、外から持ちこまれた概念であつて、「エティカ」は、「神」と云う概念がなくても充分成立する。ただ、彼は、その当時の人に解り易い概念で語る目的を以つて「神」と云う概念を用いたのである。

スピノザは、当時尙大きな勢力を有していたスコラ哲学及びローマ教会に對するひそかな鬭争として、神に歸している所の述語を、自然を神と呼ぶ事によつて、自然の上に移したのである。即ち、時代の圧力によつて、唯物論に神学的衣をまとわせにすぎない。

スピノザは、新しい生活の仕方を教える。即ち、人間の生活の仕方は、必然に自然に於ける人間の立場から出て來なければならぬ。これ、人間の生活は、自然そのものの在り方、即ち自然法に適合しなければならぬからであ

る。この点に於て、スピノザは、人間を自然の奴隸とせず、主人たらしめる生活を教えている。キリスト教は、禁欲主義即ち肉体の放棄、慾望の抑制を教えるのに反し、スピノザは、生の享樂、精神の満足、即ち人間の凡ゆる能力と力の創造的發展の生活を教える。而して、この創造的發展の生活は、自然法に従つてのみ可能である事を教えている。本著は、次のように述べている。

「スピノザの世界観全体は……、享樂的、樂天的性質を帯びている。スピノザのうちに、人間に謙讓と禁欲的キリスト教的道徳を説く隱遁者を見る事は、間違つてゐる。まさにその正反對なのである。スピノザによれば、正しい生活の仕方とは、人間の共同團體のうちに、又、理性的享樂、最高の完全性、及び生活の喜びへの努力のうちに存する。力と強さを充分に展開することである」。

スピノザは、自然（神）の自己原因を説いているが、これは上述の事柄即ち彼が唯物論者である事のも一つの裏付けとなる。即ち、

「自然が原因であれば、自然は、何等外部的原因即ち神を必要としない……。スピノザの偉大さは、彼がいれば自然の獨立性、自律性を獲得して、その昔の王者、神の王座からつき落した点にある。」

そして、本書は、次のように結論している。「同志諸君、私は、今日スピノザが生きていれば、どこに立つてであろうかを与言しようとするものではない。だが私に一つのことばは明らかだ。即ちスピノザは決して、國際聯盟のエージェントにはならなかつたであろう。又私は、決してスピノザを我々の敵に渡してはならないことを強調し度い。絶対にかすべき根拠はない。スピノザは、偉大な唯物論者であつた。我々は、彼のうちに、弁証法的唯物論の先驅者を見ねばならぬ。従つて、スピノザの眞の相続人は、ただ近代プロレタリアートのみである」。

スピノザ哲学の唯物論的理解について、以上簡単に述べたが、「神即自然」「自然即神」の公式には、多分に唯物論的に理解される面がある。特に、タールハイマーとデボーリンのように、スピノザを育成した時代思想と環境とから、推論の基礎づけをすると、強力な理由が感知される。それにもかかわらず、吾々はスピノザを偉大な汎神論者として認める事に躊躇しない。タールハイマーやデボーリンとは反對に、スピノザを單なる唯物論者として認め得ない幾多の理由を挙げる事が出来るが、それらの諸点について、一々論述する閑がない。その大要は、以上に記したスピ

ノザ哲学の内容が証示していると思う。スピノザ哲学の論評の一つとして、この問題を論末に加えて、参考に供する次第である。

(註1) タールハイマー (Thalheimer)・デボーリン (Deborin) 著「スピノザと弁証法的唯物論」昭和五年、共生閣

本書は三部から成る。(1)スピノザ時代のオランダに於ける階級関係と階級対立(タールハイマー)(2)スピノザの世界観(デボーリン)(3)ドイツ古典文学に及ぼせるスピノザの感化(タールハイマー)

(註2) 「エティカ」第一部定義二十九。同、公理一、三。第二部定理四十八、

(註3) 頁六十一

(註4) アンリ・ドゥ・ロア (Henry de Roy, 1598-1679) ウトレヒト大学教授、オランダのデカルト学説批評家。

(註5) 「エティカ」第二部定理一、二。

(註6) 頁一〇六

(註7) 「エティカ」第一部定理十六の系

(註8) 頁八七

(註9) 頁一一〇

本論文を草するに当つて用いた「エティカ」の原著は、次の英訳書である。

“The Chief Works of Benedict de Spinoza,” Bohn’s Philosophical Library, Vol. II.

日本語訳は、小尾範治氏訳「スピノザ哲学大系」(エチカ)を参考にした。

Ninomiya Gempei

Shinoza's Philosophy and Its Problems.

Resume

The fundamental principle of Spinoza's philosophy is "God is Nature" and "Nature is God". If we try to systematize the former "God is Nature", we can deduce the theory of pantheism. When we try to systematize the latter "Nature is God", we find the theory of materialism. Here, the philosophy of Spinoza results in intricacy and divergence.

However, Spinoza is a great inborn pantheist, not materialist. The purpose of this thesis is to interpret the theory of pantheism through the content of "Ethica ordine geometrico demonstrata" his masterpiece. The theory of pantheism teaches us the ways of life both religious and moral, through his original ideas like "amor Dei intellectualis" (Intellectual Love of God), "sub quadam aeternitatis specie" ("under a certain form of eternity") and "the third kind of knowledge" which means intuition that can commune with God.

At the end of the thesis, I have put a short introduction of a materialistic interpretation of Spinoza's philosophy. I believe that it will be a help to understand Spinoza's philosophy more deeply.